

13. (M) 副腎・その他の内分泌

(469-474)

副腎皮質および髄質に関するセッションで、469-471席がアドステロール、472-474席が MIBG を用いた演題であった。469席の丸岡ら(東北大, 放)は、副腎皮質癌4例(クッシング症候群型3例, 副腎性器症候群型1例)を報告し、腫瘍組織内の壊死が強いものでは、描出が比較的弱く、クッシング症候群型では健常側が抑制されるが、副腎性器症候群型では健常側にも弱い集積が認められると指摘した。470席の石村ら(兵医大, RI)は、SPECT による副腎 I-131-アドステロール摂取率を定量的に求め、左右副腎個々の摂取率が、よく副腎機能を反映し、臨床的にも有用であるとの成績を示した。471席の峯ら(癌研, 放)は、臨床的にも、血中副腎皮質ホルモン量でも、異常がないのに、副腎イメージングで強い取り込みを認める副腎腺腫2例を報告し、腫瘍組織でのステロイド合成障害によるとの成績を示した。ただ、健常側への摂取が抑制されていたため、その点に関する質疑がなされた。472席の塚本ら(北大, 核)、473席の小沢ら(岐阜市民, 内)、474席の中山ら(慶大, 放)は、いずれも、MIBG の褐色細胞腫での診断意義に関する報告で、褐色細胞腫の診断、悪性褐色細胞腫の転移巣の診断、異所性褐色細胞腫の局在診断に有用との成績を示し、合わせて両側副腎の描出が、従来、指摘されていた以上にみられること、骨転移巣では骨シンチグラフィ所見と解離がみられる症例のあることが指摘された。中山らは、神経芽細胞腫での有用性についても触れた。

全体の印象としては、アドステロールでは画像診断上、留意すべき実際の症例が提示され、副腎への摂取率を定量的に評価することにより、診断精度を高めうることが示された。また、MIBG では、臨床的に有用である点で一致した。今後は、転移巣における他の画像診断法との解離部位の質的意義の解明や、治療法への応用が期待される。

(福地 稔)

(475-479)

本セッションでは、副腎髄質イメージング製剤として開発された ^{131}I -MIBG を用い、褐色細胞腫を含む種々の Apudoma に対するシンチグラフィの検討に関する5演題が報告された。

演題 475 (塚本ら, 北大) および 476 (小田野ら, 新潟大) では、神経芽細胞腫における本剤の有用性が検討され、神経芽細胞腫の原発・転移巣の局在診断や加療後の経過観察に有用性が示唆されたが、VMA 陰性例では false negative の結果を生ずる場合があることも報告された。演題 477 (城野ら, 鹿大) では、種々の neural crest tumor に本剤によるシンチグラフィを試み、カテコラミン産生の褐色細胞腫や神経芽細胞腫には全例、集積が認められたと報告するとともに、現在まで報告をみない本剤の肺小細胞癌への一集積例を提示した。演題 478 (伊藤ら, 神戸中央市民) と 479 (中島ら, 筑波大) では、褐色細胞腫、神経芽細胞腫および甲状腺髄様癌に対する本剤の治験報告がそれぞれなされ、有用な結果が提示された。

本セッションをまとめると、 ^{131}I -MIBG シンチグラフィは、褐色細胞腫のみでなく、神経芽細胞腫、甲状腺髄様癌、肺小細胞癌などの他の neural crest tumor ないし Apudoma にも集積することが示されたが、これら褐色細胞腫以外の腫瘍に対する臨床的有用性を確立するためには、さらなる検討が必要と考えられた。また、欧米では悪性褐色細胞腫や神経芽細胞腫の ^{131}I -MIBG による治療も試みられており、本邦でも本剤の治療面における応用が可能となることが期待される。

(中條政敬)